

松山市地方創生女性会議
松山市地方創生若者会議

報告書

《 目 次 》

I. 地方創生女性会議の概要	1
1. 会議の目的.....	1
2. 会議の概要.....	1
II. 地方創生女性会議の結果概要	2
1. 意見のまとめ.....	2
III. 地方創生若者会議の概要	9
1. 会議の目的.....	9
2. 会議の概要.....	9
IV. 地方創生若者会議の結果概要.....	10
1. 意見のまとめ.....	10

I. 地方創生女性会議の概要

1. 会議の目的

「松山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定を進めるに当たり、「松山市 結婚・出産・子育てに関するアンケート」における調査結果の背景のほか、市民の結婚・出産・子育てに関する課題や、希望を実現するための取組アイデアを把握し、結婚・出産・子育てを希望する人々にとって、松山市がより魅力的なまちなるための取組の参考とすることを目的として実施した。

2. 会議の概要

(1) 実施日時・場所

日時：2015 年 8 月 29 日（土） 10:00～12:00

場所：ひめぎんホール 3 階 第 8 会議室

(2) 参加者

松山市に居住する 20 代～40 代の既婚女性 32 人。

(3) 会議の進め方

4 つのグループに分かれて、3 つのテーマごとに、2 つのステップで意見交換を行った。

■話し合いのテーマ（全グループ共通）

- ① 出会い・恋愛・結婚
- ② 妊娠・出産
- ③ 子育て

■話し合いのステップ

STEP 1：あなたの心配・お悩みは？お友達や周りの人はどうですか？

STEP 2：心配・お悩み解決のための取組は？（ミライへのメッセージ）

II. 地方創生女性会議の結果概要

1. 意見のまとめ

(1) 出会い・恋愛・結婚について

① 未婚率上昇の背景

1) 結婚に対する考え方や環境の変化

未婚率が上昇している理由については、「結婚に対する考え方や環境が変わってきた」という意見が複数のグループで出た。その背景として、経済的に自立していること、自分の生活スタイルを維持したいという意識が強いことや、結婚の良さやメリットが見いだせないことなどから、そもそも「結婚しよう」「結婚しなければならない」という意思が男女ともに芽生えない（いわゆる「絶食系」）という意見のほか、周囲から結婚を働きかけるような環境（例えば、職場の同僚から誰かを紹介される、企業合同の交流会で知り合う等）がなくなったという意見があった。

2) 出会いの機会の少なさ・30歳の壁

「出会いがない」という意見も複数のグループで出ている。近年では、気軽に参加できる街コン等の出会いイベントが増加してはいるものの、仕事をしている女性の場合は忙しいためにイベントに参加する時間がなく、また普段の生活の中での出会いの機会もないという点が指摘されている。また、世間体から婚活イベントへの参加をためらう（ガツガツしていると思われる、知人に知られると恥ずかしい）という意見もあった。

さらに、30歳を超えると、出会いの機会自体が少なくなったり、年齢を気にしてイベント参加へのためらいが生じたり、交際が結婚前提になる「重さ」が、交際に踏み切るにあたっての男女双方へのプレッシャーになるとの指摘もある。

一方、出会いの場はあっても、結婚を考えるほど魅力的な相手との出会いがない、というコメントもあった。

② 結婚を検討するにあたっての不安

1) 生活の変化に対する不安

結婚を機に地元を離れる、夫が転勤の多い仕事に就いているなど、知らない土地での生活をスタートさせることに対する不安のほか、夫が長男であるということから生じるプレッシャー（同居、出産、介護）など、生活環境や人間関係の変化に対する不安が挙げられた。また、特に女性の場合は、結婚後も仕事を続けられるかどうかや、積み上げてきたキャリアを失うのが惜しいなど、キャリアの継続に関する不安についての指摘があった。

2) 経済的な不安

結婚式を挙げるための資金がなかったことや、経済的な面での先の見通しが立たなかったこと（自身が出産で仕事を辞めることになると思っていた、相手が自営業だった）なども、結婚を検討するにあたっての不安の1つとして挙げられている。

③ 課題解決のための取組

1) 出会いの機会の創出及び質的向上

出会いの機会の創出の必要性については、全てのグループから意見が出ている。あまり結婚を意識せずに気軽に参加できるイベントの開催や、その反対に結婚のイメージが湧きやすい結婚式場でのイベント開催というアイデアのほか、企業同士の合同イベントや職場での紹介など、「昭和チックな出会い」に関するアイデア、さらに、同窓会や、成人式と同様に 25 歳、30 歳などの年齢の人を集めるイベント開催などのアイデアも提示されている。

また、出会いの機会の質的な向上については、婚活イベント参加者への事前ガイダンスや、お見合に結びつけるためのマッチングシステムの構築、仲人のような世話人が必要との意見が出た。

2) 結婚のプラスイメージを伝える取組

結婚の良さやメリットを見いだせない、あるいは結婚に対するマイナスイメージを持つ層に対しては、結婚に対してプラスのイメージを持ってもらえるよう、働きかけることが必要という指摘があった。具体的には、結婚や子育てが楽しいと感じてもらえるようなイベントや、既婚者の体験談を聞ける座談会の開催などのアイデアのほか、それらを中高生向けに実施するというアイデアも出された。

3) 女性が仕事を継続できる社会づくり

仕事の継続可否を考えて結婚をためらう女性が、結婚に踏み切れるように、結婚や出産をした後も仕事を辞めなくてよい（生活スタイルを大きく変えなくてもよい）環境づくりの必要性が指摘された。具体的には、結婚しても仕事を続けるのが当たり前の社会を構築することや、残業をなくすこと（家事時間やひとりの時間を確保するため）のほか、企業に対しては、有給休暇を取る従業員がいる職場への助成金支給などのアイデアが出された。

また、経済的な不安を持たないためにも、女性も経済的に自立することが必要で、それを教育の場から伝える必要がある、という意見もあった。

4) ライフプランを設計するための教育

男女ともに中高生ぐらいの年齢から、結婚・出産・子育てや仕事について、将来の計画を立てる「ライフプラン設計」の教育を行う必要性について、「自身はライフプラン設計の教育を受け、同級生も結婚が早かった」という参加者の経験を踏まえた意見が提示された。妊娠・出産に関わる問題だけではなく、就職など人生全体を見通した計画になるよう、保健ではなく家庭科等の授業で取り扱うことが望ましいとされている。

また、結婚を検討するにあたり、結婚生活に関する「経済的な見通し」を把握できるよう、将来の妊娠や出産にかかる費用等の情報を提供し、計画を立てやすくするような取組が必要との意見もあった。

(2) 妊娠・出産について

① 妊娠・出産に関する心配・悩み

1) 妊娠・出産そのものに関する不安

妊娠・出産そのものに対する不安がある（あった）という意見が複数みられた。具体的には、妊娠中のつわりの辛さや出産に耐えられるかどうか、高齢出産、帝王切開などの身体面での不安や、母親になることに対する不安（行動が制約されるのではないか、母親としてやっていけるか等）などが挙げられている。

2) 不妊に関する不安

不妊についても、複数のグループから意見が出ている。参加者の経験や印象では不妊に悩む人は多く、第1子の不妊だけではなく、第2子の不妊も多いという声が聞かれた。不妊は体力的にも精神的にも負担であり、さらに、不妊治療に対する会社や親の理解がない、産科医の中傷に傷ついたなど、自身を取り巻く人々の配慮不足についてもコメントがあった。

3) 仕事との両立に関する不安

妊娠と仕事との両立の不安については、全てのグループで意見が出ている。仕事と体調・体力とのバランスの問題のほか、本人の遠慮（迷惑がかかるので休めない）、職場での理解や配慮の不足（出産したら辞めると思い込んでいる、子どもが産まれるのに夫が転勤させられた、等）、制度の浸透不足（育休制度はあるが取りにくい）、休職・復職に関する不安（休職中のフォローがない、元の条件で復職できるかどうか）等が挙げられている。

関連して、仕事ができない間や、育休中の手当が支給されるまでのタイムラグ等の期間の経済的な不安に関するコメントもあった。

また、職場に限ったものではないが、マタハラ（妊婦は足手まといと言われた、病気ではないので社会が配慮してくれない）の経験についても意見が出た。

4) 知識や情報、サポートの不足

自身が妊娠や出産の「適齢期」を知っておく必要があるという意見のほか、親世代の「結婚したら子どもができて当たり前」という認識がプレッシャーになったという意見も聞かれた。また、かかりつけの産科を決める際に、どこが良い病院なのか悩んだという意見が出た一方で、ネットや本などに情報が多すぎて困惑するという意見もあった。

その他、身近に相談相手がいなかったことや、産後のサポートをしてくれるところがなかったという意見があり、特に親が近くに住んでいない場合のサポートの必要性についてもコメントがあった。

② 課題解決のための取組

1) 妊娠・出産に関する知識を身につけるための教育

「赤ちゃんは可愛い」「つわりはしんどい」などの抽象的な内容ではなく、より具体的な内容で、男女問わず、義務教育から妊娠・出産についての教育を行う必要があるという意見や、妊娠・出産の辛さだけを若い世代に伝えると不安をあおるため、よいイメージをもつような伝え方が大切との意見が提示された。

また、将来の経験に備えてもらうため、教育の中で「妊娠・出産にも適齢期がある」ということを伝えるというアイデアのほか、妊娠・出産前の若い世代だけではなく、妊娠中の親に対する教育の機会を増やすことも提案された。

2) 妊娠・出産に対する職場の理解を促進するための取組

妊娠中の女性が大きな負担を感じずに仕事を続けられるよう、子育てに関する休暇を取りやすい雰囲気づくりのほか、社員が育休を取得した企業への奨励金の支給等、子育てを支援すると企業にメリットがあるような制度の必要性について意見が出た。

また、制度は整いつつあるが、活用しやすいという状況にはなっていないため、制度が活用できる環境づくり、さらには男性も育休を当たり前に取得できる環境づくりの必要性についてもコメントがあった。

3) 安心して妊娠・出産できるような情報発信の工夫

安心して妊娠・出産できるよう、行政からの情報発信にも工夫が必要との意見があった。具体的には、子育てに関する相談窓口の一元化や、自ら情報を調べるのが得意ではない層をターゲットにしたSNSによる情報発信、転入者への支援制度の説明などのアイデアが提示された。また、かかりつけの産科医を決めるにあたり、病院に関する様々な情報の集約（良い病院、良い産科医を見つけるための情報）や、産後のサポート情報の必要性も挙げられている。

さらに、妊娠中にも不安な事柄を相談できるよう、小さい子どもがいる母親と交流する機会を求める声もあった。

(3) 子育てについて

① 子育てに関する心配・悩み

1) 子育て支援サービスの不足

子育て支援サービスについては、様々な意見が提示されており、特に病児保育の受け皿の少なさについては複数の意見が出ているほか、保育園に入所はしたが希望した園ではなかった、2人目を妊娠して仕事を辞めたら1人目が退園になったなど、「待機児童ゼロ」の実態について課題を提示する意見もあった。また、保育園探しにあたり、情報が集約されておらず個別に問い合わせなければならない不便さや、ファミリーサポートセンターの体制の薄さ(人数が少なく、必要な時にサービスを受けられない)なども指摘されている。さらに、「小1の壁」が大きな課題であるが、放課後児童クラブでは預かり時間が短いというコメントもある。

また、子育て支援センターのサービスが利用できるのが月～金であるため、仕事をしている場合は利用しにくいとの意見もあった。

2) 育児に関する不安やプレッシャー、それを相談する相手の不在

子育てをするうえで、「よい母親でなければならない」というプレッシャーを感じているという意見が出たほか、きちんと子育てができているかどうかや、子どもの育ち方などに不安を感じる参加者もいた。また、自分の時間が持てなくなる不安などもあり、困った時に相談できる相手の必要性が挙げられている。

相談については、職場の先輩や友達に相談した、あるいは子どもを預けて学べる教室で情報交換をしたという意見がある一方で、親の世代とは子育ての感覚が合わず、また悩み事は友達には相談しにくいという指摘もあった。

3) 子育てにおける「父親不在」

父親(夫)の子育てへの関わりが少ないという意見は、全てのグループから出ている。「夫がほとんど育児をしない」というケースもあり、「手伝っている」や「参加している」という他人事のような関わり方ではなく、もっと主体的に関わるべきという意見が出ている。また、子育てにお金がかかるため自身も仕事をしたいが、夫の協力が期待できないというコメントもあった。

一方で、「精神的な支えでいてほしい」「初めから期待していない」という意見もある。

4) 仕事との両立の困難さ

子育て中の就労に関しては、急に休む必要が生じるなど、突発的な対応を求められることが多く、自ら復職がしにくいと考えているケースと、採用されないというケースがあった。また、フルタイムで働くのは難しいという意見も複数みられた。

さらに、勤務先での産休・育休についても、他の人が取らないので取りにくい、部署や上司により考え方が違う、時短はパートタイマーしか使えないなど、制度はあっても活用しきれていないという意見が出ている。

5) 経済的な不安

子育てにはお金がかかるという意見も複数みられ、「これ以上産まない」という選択につながっている可能性があることが指摘されている。また、子育てにかかるお金のみならず、老後の資金もあわせた場合の経済的な不安についてのコメントもあった。

6) 子どもの遊び場・子どもとの外出に関する不便

子どもの遊び場、特に公園の不足については、複数の意見が出た。歩いて行ける場所に公園がない、車で行っても駐車場がない、小さい子が遊びにくいという意見のほか、近くに公園があるかどうかを調べる手段がない、との指摘もあった。

また、子どもとの外出にあたって、子どもを連れていけるレストランや、おむつ替えができるトイレの情報（常時更新され、しかも実際の使用者による口コミ情報）が必要との意見も出された。

7) 子どもの安全に関する不安

子どもの安全については、犯罪が心配で、子どもに一人で留守番をさせられない、高校生になっても目が離せないなど、不安を持つ参加者が複数みられた。

一方、最近是不審者情報がメールで発信されるが、不審者扱いされるかもしれない、地域の人が気軽に子どもに声をかけられないのではないか、との指摘もあった。

② 課題解決のための取組

1) 子育て支援サービスの充実

子育て支援サービスについては、病児保育やファミリーサポートセンターのサービス量の充実に関する意見や、子育て支援に関する相談窓口の一元化、土日の相談対応、空き状況も含めた保育園情報の一元化等のアイデアが提示された。

また、相談の機会として、「こんにちは赤ちゃん訪問」の複数回実施や、定期的な家庭訪問、誕生から就学までを同じ職員がサポートする仕組み等についてのニーズが示されたほか、身近な相談相手や子育て経験豊富な先輩からのアドバイスが必要との声も聞かれた。

さらに、子育て中の母親が息抜きできる場づくりや、プレッシャーから解放されるような雰囲気（「大変なのは一時期だけ」「もっと肩の力を抜いていい」ということを伝える）を醸成することの必要性や、サポート主体としての地域コミュニティに自らが積極的に関わることの大切さについての意見も出た。

2) 父親がもっと子育てを担える環境づくり

父親も子育てを担って当たり前という意識を社会全体で醸成する必要性は、複数のグループで指摘されている。男性がもっと子育てを担えるよう、男性の育児休暇取得の定着（義務化）や、教育現場や企業での男性への育児教育の推進を通じた男性の意識改革が必要との意見があった。さらに、子育てを担う父親が集まって悩みや情報を共有できる場を創出するというアイデアも提示された。

また、家事や育児の分担が進むには、「残業なし」の職場であることが前提となるため、子育てに対する理解を深めるよう、企業に対する働きかけを行うことも大変重要とされている。

3) 子育てに対する経済的支援

子育てについては、経済的な理由から2人目、3人目をもうけることを諦めたケースがみられ、「少子化は結局のところ経済的な問題」であり、「産めば産むほどメリットがあるならがんばれるが」との声も聞かれた。

また、具体的なアイデアとしては、ベビーカーやベッドなど、使う時期が限られている物品の貸出や、おむつの支給などが提示された。

III. 地方創生若者会議の概要

1. 会議の目的

「松山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定を進めるに当たり、「松山市 進学・就職に関するアンケート」における調査結果の背景のほか、市内の学生に進学や就職に関する意向や松山市をより魅力的なまちにするための取組アイデアを把握し、学生の希望を松山市で実現するための方策を検討する際の参考とすることを目的として実施した。

2. 会議の概要

(1) 実施日時・場所

日時：2015 年 8 月 29 日（土） 14:00～16:00

場所：ひめぎんホール 3 階 第 8 会議室

(2) 参加者

松山市に立地する高等学校・大学・専門学校に通学する生徒・学生 18 人

松山市に立地する事業所に勤務する社会人 4 人

(3) 会議の進め方

4 つのグループに分かれて、以下のテーマについて意見交換を行った。

① 学び・仕事について

【STEP1】進学先・就職先を考える時に重視することは何ですか？

【STEP2】働く場としての松山の魅力は何ですか？松山に足りないものは何ですか？

【STEP3】「松山で就職したい！」と思えるようなまちになるために必要な取組は？

（ミライへのメッセージ）

② 暮らしについて

【STEP1】就職・結婚したら、どんな条件が整ったまちに住みたいですか？

【STEP2】暮らしの場としての松山の魅力は何ですか？松山に足りないものは何ですか？

もし進学や就職で一度松山を出ても、また戻って暮らしたいと思いませんか？

【STEP3】「ずっと松山で暮らしたい！」と思えるようなまちになるために必要な取組は？

（ミライへのメッセージ）

IV. 地方創生若者会議の結果概要

1. 意見のまとめ

(1) 学び・仕事について

① 進学先を考えるとときに重視すること

進学先を検討する際に参加者が重視することは様々であり、将来就きたい仕事を見据えた学部選択だけではなく、学力を基準にして学部選択をするという意見もあった。

また、大学での専攻以外の視点として、人や企業との出会いの範囲の広さや、アルバイトをする時の利便性を挙げる参加者もいた。

進学先地域の希望（愛媛県内・県外）が明確な参加者については、学費・生活費を考慮して県内を希望するという意見と、都会への憧れ、一人暮らしへの憧れなどから県外を希望するという意見があった。

② 学びの場としての松山の魅力・松山に足りないもの

学びの場としての松山の魅力については、大学のキャンパスが市街地に近い（アルバイトしやすい、遊ぶ場所がある）ことが挙げられている。

一方、松山に足りないものとしては、学部の選択肢が少ないことや、県内出身者が多く出会いの範囲が狭いことが挙げられている。

③ 就職先を考える時に重視すること

1) やりたい仕事であること・やりがいがあること

「やりたい仕事であること」と「やりがいがあること」という意見が最も多く、就職希望の全てのグループから出ている。自分がやりたいと思う職種や仕事内容かどうか、自分の技術や知識を生かせるかどうか重要であるという意見のほか、「やりがい」については、自分が人間的に成長できるか、地域社会に貢献できるかという視点も提示された。

2) 労働条件がよいこと

労働条件のよさに関する意見も就職希望の全てのグループから出ているが、特に多いのが「給料のよさ」と「休暇がきちんと取得できること」であり、女性の参加者からは、出産後も仕事を続けられるよう、産休・育休の制度が整っていることという意見が挙がっている。

関連して、「安定している」（安定が得られる仕事である、倒産しない、不測の事態が生じてても給料が支払われる）という意見も複数提示された。

3) 会社の雰囲気や人間関係

仕事のしやすさという観点で、会社の雰囲気や人間関係を重視するという意見も挙がっている。会社の雰囲気に関しては、単に雰囲気がよいというだけではなく、具体的に「働いている人が楽しそうにしている」という意見が挙げられ、人間関係については、人間関係がよいほうが仕事を長く続けられるという視点や、上席者の間との意見交流のしやすさ

という視点が提示されている。

④ 働く場としての松山の魅力・松山に足りないもの

1) 松山の魅力

魅力については、様々な観点から意見が提示された。県内では企業数の多い地域であるという意見が出ているほか、地方ならではのよさがあるという視点から、「地方だからこそ自分の頑張りが結果に出やすい」という意見や、「6次産業の中心的な場所である」という意見、災害がないために業務がストップしないという意見も提示された。

人との結びつきという視点では、「人口が多くいろいろな人と関われる」ことや、「都会よりも人と深く関われる」という趣旨の意見が挙げられているほか、企業についても、規模は小さくとも地域との関わりを大事にしているという意見があった。

また、自分がやりたい仕事が松山にあることや、「地元であること」が理由になっている意見（住み慣れている、親から言われた）も見られた。

さらに、生活環境に関する意見として、住みやすさや交通利便性の高さ、まちの魅力などを評価する意見もあった。

2) 松山に足りないもの

ア. 仕事の選択肢

仕事の選択肢の少なさについては、複数のグループから意見が提示された。意見の内容についても、「県外のほうが仕事や職種の選択肢が多い」「県内企業の求人にやりたい仕事がない（積極的な選択ができない）」「技術を生かせる仕事がない」「製造業が少ない」「学校（高校）に来る求人が少ない」など、具体的なものが多い。

イ. 大企業や中堅規模の企業

大企業や中堅規模の企業の少なさについても指摘があった。具体的には「松山市には大企業がないのでどうしても都会の大企業に目が向いてしまう」というものや、「県外企業は設備の規模も大きく、より魅力的に見える」という意見が出ている。

関連して、企業の認知度が低く、魅力のある企業がわかりにくいという指摘もある。

ウ. 活気や魅力

活気のなさや魅力のなさについても、複数のグループから意見が提示されている。具体的には、「まちの賑やかさがなく」「都市としてのネームバリューがない」「（特に東京からみた場合の）経済規模が小さく勢いがなく」等の指摘があった。

エ. 交通利便性

上記のほか、交通利便性の低さ（市内電車、市外へのアクセス）が挙げられている。

⑤ 松山で進学や就職をしたいと思えるようにするための取組

1) 仕事の選択肢を増やすこと

仕事の選択肢を増やすことについては、複数のグループから意見が出た。単に雇用や職種を増やすことだけではなく、「学んできたことを生かせる雇用」「大企業の雇用」や「若者が魅力を感じる雇用」、「大学が実施する最先端の研究に係る雇用（植物工場等）」など、雇用の質についての視点を含む意見が多い。

関連して、若い人が働きたいと思える企業や、県外本社企業の事業所等を誘致することによる雇用の創出などのアイデアも提示された。

2) 地元企業のPR強化

若者に対する情報発信が少ないために、地元企業の魅力がわからないという意見も複数のグループから出ている。また、具体的な方策として、「説明会の開催」や「地域のイベントへの参加」、「学生と社会人の交流の場の創出」が挙げられているほか、「求人票の内容を詳しく書く（県外企業のほうが詳しい）」というコメントもあった。企業のPRを支援するための取組の必要性も指摘されている。

さらに、都会から入る情報量の多さに対抗できる量の情報発信が必要とのコメントもあった。

3) 独自産業の創出

他地域にはない松山の特色を生かした独自の産業を創出する、関連して他の地方都市との違いや魅力を明確にするというアイデアも提示された。

4) その他

その他のアイデアとして、企業間のつながり強化（交流会の実施や有事の際の助け合い）や市内企業への補助（社員の交通費と住居費を補助して地元人材の雇用を促す）、キャリア教育の充実等が挙げられた。

(2) 暮らしについて

① 就職・結婚したらどのような条件のまちに住みたいか

1) 交通利便性が高いまち

交通利便性の高さについては、複数のグループから意見が出ている。市内、県外、海外との間の移動が便利なところ、旅行・出張が気軽にできるところ、通勤しやすいところという意見のほか、大都市圏の交通機関との比較（駅の規模、新幹線の存在）に言及したコメントもあった。

2) 生活利便性が高いまち

買い物や医療、公共機関の利便性の高さについても複数のグループから意見が出ており、生活利便性の高さを「最低条件」とするコメントもみられた。

3) 暮らしやすいまち

住みやすい、土地や家賃が安いなど、住環境に関連する暮らしやすさについての意見のほか、保育園・幼稚園をはじめとする保育・教育施設が充実し、育児に理解があり、子どもの遊び場があるなどの「子育てしやすいまち」、道路整備や防災、介護施設等が充実している「安心・安全なまち」に関する意見も提示された。

4) 人とのつながりがあるまち

町内会等の地域コミュニティが機能しており、相談や助け合いができることや、仕事以外の交流・交友関係が広げられることなど、「人とのつながり」を重視する意見も複数のグループから出ている。

5) 楽しいまち、遊ぶところがあるまち

観光資源が充実した観光地や、遊ぶところが多いまち、関連して、他地域の人に自慢できるものがあることなど、まちの楽しさに関する意見も複数のグループから出ている。

② 暮らしの場としての松山の魅力・松山に足りないもの

1) 松山の魅力

松山の魅力としては、「環境のよさ」が複数のグループで挙げられており、天候や自然環境、起伏が少ないという地形的な条件のほか、機能が中心にまとまっていること、観光地であり海外からも観光客が訪れていること、NPOなどによる市民活動が活発であることなどが評価されている。

2) 松山に足りないもの

松山に足りないものとしては、買い物利便性の低さ、友達と遊ぶ（過ごす）ところの少なさ、公共交通の不便さに加えて、サブカルチャー等の新しい文化や面白みのなさなどが指摘されている。

また、情報発信に関して、松山の情報が十分に発信されていない、他県から見た印象が薄いという意見のほか、松山の中での情報伝達が不十分との声も聞かれた。

③ 松山ですっと暮らしたいと思えるようにするための取組

1) 若い世代が魅力を感じるまちづくり

参加者からは、「自分たちが遊びにいける場所（友達などと過ごす場所、特に商業施設）がない」「おしゃれな店がない」という趣旨の意見が複数挙がっているほか、若い世代が楽しめるようなスポーツイベントや音楽イベントの不足が指摘されており、それらを充実することで、若い世代が魅力を感じるようなまちにしていくような取組が求められている。

2) 対外的なPRの強化

県外における松山並びに愛媛の認知度の低さに関する意見から、県外に向けた情報発信の強化（「愛媛イコール〇〇」と言われるようなもののアピール、ゆるキャラを活用した発信、大規模イベントを実施することによるアピール、Uターン者が幸せに暮らしている姿のPR）の必要性が指摘されている。

関連して、地域の産品や松山そのもののブランド化（他都市・他県との差異の明確化）によるPRのほか、観光関連のインフラ整備（松山にしかない施設の整備や外国人観光客向けの外国語表記の増加）等、交流人口増加のための取組の必要性についても意見が出た。

3) 交通利便性の向上

交通利便性については、「高い」という意見と「低い」という意見が併存しているが、概ね、中心部の交通については利便性が高く、郊外や県外、海外にアクセスするための交通については利便性が低いと認識されていると考えられる。

ここでは、車がないと移動しづらい、電車の本数が少ない、バス料金が高等、日常交通に関する意見のほか、空港アクセスの充実やJRの活性化、「旅行にいきやすく、観光客が訪れやすい」など、主に県外アクセスの視点での意見が提示されている。

4) 暮らしやすいまちづくり

上記以外には、子育てしやすいまち（子どもが遊べる場所を増やす、教育に力を入れる）や歳を取っても暮らしやすいまち、安心・安全なまち（水資源の確保や事故のないまち）、地域コミュニティの強化等、暮らしやすいまちづくりを求める意見が複数みられた。